
新月のご招待

すももっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新月のご招待

【NZコード】

NZ682J

【作者名】 すももっち

【あらすじ】

新月の夜、椿はダステイニー二国へと召喚され、四人の内の誰か一人と契りを結ばなければ日本に帰れないと宣言された。
しかし第一候補の男は見目麗しいが中身は腹黒?
不良高校生椿は日本に帰れるのでしょうか。
ただいまパーティー編に突入しました。

新月の夜。

月が隠れるその夜に、神様に内緒でお呼ばれされるの。

黒い日に黒い娘。

さあ見つけて、「いらっしゃる」。

それが君の

“運命の人”

古くからこの国に伝わる詩。

成し遂げるのは王家の男。

さて、次期国王の黒い娘は誰であるつか……。

○○*○○

なんだここは……。

驚きよりも先に怒りが溢れたのは、果たして性格のためであろうか。椿はぐるりとあたりを見回す。

薄暗い教室ほどの広さの部屋で、四隅にはロウソクが立っている。

そのロウソクは今にも消えそうな短さだった。

胡散臭い占いの館のようだと椿は思った。

しかしその胡散臭い部屋の中心に制服姿で地べたに座っているのが自分だと思うと、なんとも言えない気持ちになる。

冷静にあたりの分析ができるほど椿は大人しい性格ではない。

目の前の、それこそ占い師のような格好をした人物をとりあえず睨

み付ける。

男だか女だか子供か大人か、なんの情報も読み取れないほどすっぽりと黒い布で全身を覆い、更には顔までその布で隠している。やはり訳が分からないので胸ぐらを掴むのはやめておいた。

「…なんだよいつたい

全ての事柄が疑問なため、全ての事柄に對しての疑問として口にした。

その低い椿の言葉に、目の前の黒い布の人物はぴくっと反応した。戸惑わしげに顔を上げたその黒い布の人物と椿は目を合わせる。そして目を合わせると同時に、お互いが目を丸くした。

(お、女の子じゃん…)

薄暗く、しかも光はロウソクの灯りだけなため、はつきりとはその人物の風貌は分からない。

しかし整っているのだろうことは椿にも理解できた。

ロウソクのせいかもしれないが、瞳が赤く見える。

(外人?つかどこの国が赤い目なの…?)

椿の頭では見当もつかない。

しかし最近ではカラー「コンタクト」という画期的な物も販売されてい

る。
占い師もそんな小細工をしなければいけないほど不景気なのか…。
と、少しズレた感想を持った。

「茶色の髪…?」

占い師（仮）が椿を見ての第一声がそれだつた。

椿が小さくすつとんきょうな声を上げたのは言つまでもない。

椿は肩よりも少し長めの髪をグラウンに染めていた。

椿はまだ高校生であるため教師陣には散々注意を受けているが、本人はどこ吹く風。

何度言われようと髪を黒に戻す気はこれっぽっちもなかつた。

それどころか次はもつと明るくしようと思つていたほどである。

それよりも、この占い師の女の子がグラウンの髪に驚くことが椿は不思議だつた。

今どきは普通なことなのに。

椿がきょとんとした表情で占い師の女の子を見返すと、その女の子はぶんぶんと首を横に振つた。

「無事、新月の召喚が完了致しました。」報告をお願いします」

か細く綺麗な声だつた。

その声が淡々と言葉を告げている。

そこでやつと椿は占い師の女の子の背後に数人の人物が立つていてことに気付いた。

この人物たちもこの占い師と同じように黒い布で全身を覆つていて、その1人が短く返事をしたかと思うと、近くの扉から部屋を出ていつた。

一瞬だけ開いた扉から、キラキラと光の筋が入り込む。その眩しさに椿は目を細めた。

この部屋が暗いからかもしれないが、その光が椿の目にはとても綺麗に映つた。

この部屋から外に出たい。

そんな衝動が椿を襲つた。

しかし今はこの占い師と対峙している手前、その衝動を抑えることにする。

(とせ思つたもの…)

何か話せばここに、いの占て歸はれつき以来口を開けりつしない。

椿の最初の質問は完全無視。

椿がそれに癪癪を起さない訳がなくて。

「あんた誰？」
「…」

冷静さを取り戻しつつ椿は田の前の占て師に問い合わせる。
冷静さを取り戻しつつあると言つても、口調はシンシンと厳しいものとなつてゐるが。

その椿の言葉に占て師は怯んだように見えたが、やはつ口は開かなかつた。

彼女にとつて今椿と言葉を交わすのは御法度とされてゐる。
どんなに恐怖を煽られたとしても、言葉を返すなど持つての他なのだ。

しかし椿がそれを知るはずもない。

椿のイライラは徐々に増していく。

「なんとか言ひなさいよ

自然と命令形になつてゐる。

それでも占て師はつととむすんとも言わない。

「言えつづーの

「…」

「おーい

「…」

そろそろ椿の堪忍袋の尾も切れるというもので。

頭の中で何かがブツーンと音をたてて切れ、血液が逆流するのを感じた。

どしんと音を響かせながら立ち上がり、床にそのまま座っていた占い師を上から見下ろした。

その占い師は呆気に取られたように椿を見上げ返す。

「いい加減にしろっ！」

思つたよりもその声は部屋にこだまする。

占い師の背後の黒集団も動搖しているのが椿にも感じ取れた。しかしそんなのは構わない。

もともと田立つのはキレイな訛じやない椿にとって、悪田立ちだとしても別段気にすることは何もない。

「うううははは！」で何ーあんたらは誰だ！なんであたしはうううているんだよー！」

力の限り叫んだため、言い終えた後の椿はははあと荒い息を繰り返した。

占い師はぽかーんと口を開けて椿を見つめ続けている。その表情だけで椿の怒りはするすると終息した。

（ダメだこの子…。ケンカ慣れしてないわ…）

いつもの椿の周りの奴らなりばすuguに怒号が返つてくれる。

しかしそれはそういう雰囲気で育つたからであって、それに端正がなければそうはいかない。

良い例がこの田の前の占い師だ。

この占い師にいくら怒鳴ったとしても、さつと泣き出すのがオチだ

ろうと椿は思った。

椿だって男勝りだなんだと言われてもやはり女の子。泣かしたい訳ではなかつた。

「他に誰かいないわけ？」

その占い師の横を通り過ぎて扉へと真っ直ぐ足を向けた椿に、さすがに占い師も焦つたのだろう口を開いた。

「お、お待ちくださいませ、黒姫様！」

（へりひめさまあ？）

椿が振り返つて占い師を見つめると、罰が悪そうな顔をされた。やつてはいけないことをやつてしまつた！といつぱり、その顔から徐々に血の気が引いていく。

若干の申し訳なさが込み上げるがしかし、椿にはなぜ罰が悪いのか分からぬ。

「何？」

と聞いたところではやはり話さない。

更に椿を逆撫であるとも知らずにやつてこらのだとしたら、それはかなり質が悪い。

ムキーとなつた椿はもう止められなかつた。

またドシドシと歩みを始めた椿に占い師が尚も同じように呼び止めるが、次は止まるのをやめた。

一言でいえば「めんどうくさい」。

扉付近に控えていた黒の集団もおたおたするばかりで、椿を止めようと手を伸ばす者はいない。

止めたいのに、だ。

それをいいことに椿はバンッとけたたましい音をたてながら扉を開けた。
あまりの眩しさに椿は目を閉じる。

光だ。

白い光。

昼間の太陽という、そんな光ではなかつた。

(真つ白い光…?)

椿は少しづつ目を開けていった。

完全に目を開いたところで、椿は呆然とした。

(な、なんだ…?)

城か、豪邸か。

どちらにしても椿とは縁がない建築物である。
しかし現在自分はそう呼ばれるであろう場所にいると思われる。
右を見ても左を見ても正面を見ても、豪華豪華豪華…。
赤いどこまでも長く続く絨毯。

キラキラと光を吸い込んだような窓枠。

白光りしている壁には中世のような絵画。

ゴッホが書いたと言われても、椿は納得しただらう。
廊下、なのだらう。

椿の中の廊下の概念とは程遠いが。

「あなたは…」

声に振り向くと、男が目を見開いた状態で立ちすくんで椿を見ていた。

その男を見て、椿は息をつまらせた。

(こんなのアリ…?)

男の人には言うべきかは分からぬが、その男は間違いなく美人だつた。

女性らしい訳ではない。

顔のつくりとか、その身のこなしどと、その人の持つオーラとか。何もかもが美しい。

(ああ、髪のせいかも)

男の背に流れる髪は椿よりも長い。

腰ほどまでのクセのない髪は少しの風でもサラサラとなびいた。そして目を引いたのはその色だ。

椿には見慣れない銀色の髪だった。

(こんな綺麗な人間アリなわけ…?)

アリとか無しの話ではないのだが、椿は頭の中でそんな自問自答を繰り返した。

またその男性の服装がシミ一つなく白く輝いてるものだから、自分がこんな紺の制服を着ていることが恥ずかしくなった。

地元じゃ可愛いと評判の制服なのだが…。

しかも髪は毛先があつちこつち自由に遊びまくっているので、そのストレートの髪が羨ましく感じる。

(ただロン毛の男性はいががなものかねえ…)

その男性に対する椿の最終的な感想はそれで締め括られた。

「あなたが僕の黒姫ですね」

そう言ってふわりと微笑むその男性。

ドキリと胸が音をたてたのは致し方ない。

「エルザイス様っ…！」

椿の背後からの焦ったような声は、占い師の女の子のものだった。椿がそちらに目を向けると、占い師は今にも泣きそうな顔で綺麗な男性を見つめていた。

するがるように、しがみつくようなその目。

椿はあまり好きじゃない目だった。

「言い訳はいらないよ、リーナ。後で僕の職務室に来なさい」

美しいだけに威圧感はバツチリだった。

椿に向けられた訳でもないのに、思わず椿まで竦んでしまう。一見微笑んでいるだけにしか見えないが、オーラは確実にどす黒い。いつたいこの占い師がこの人の何に不興を買ったのかと占い師を覗き込むと、今にも倒れそなほどに真っ青で、小刻みに震えているようだった。

「だ、大丈夫…？」

それは椿でさえも心配になってしまふほどに。

椿にそう声を掛けられた占い師は、これでもかと言つほどに目を丸くしたため、椿は首を傾げることになった。

心配するというのは、これほどまでに驚かれることなのだろうか？

「黒姫、あなたは僕と契りを結ぶまでは他の誰とも会話をすること

ができないのですよ

「は？」

契り？結ぶ？

椿には全く理解できない言葉の羅列。

今度は不審げな様子でその男性を見つめた。

椿とはまだ会ったばかりなのだが、この可愛い占い師をここまで追い込む言葉を述べる男性に、あまり良い感情は抱けなかつた。
そんなこともあり、見つめるというよりも睨み付けるようになつていた。

「まだ何も理解できないでしょ！」やつくづく説明いたします」

しかしそんな椿を何も気にした様子もなく、微笑みのまま男性は椿の背中に手を添えた。
背中がゾクリとした。

黒姫召喚 1（後書き）

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。
きっとどのみな投稿になると思いますが、気軽に楽しんでください
ませ。

「意見・「感想」気軽にお願ひします。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

2 (前書き)

年齢制限はありませんが、ほんの少しだけ言葉が出てきます。悪しからず。

銀髪の青年は椿にエルザイヌとだけ名乗った。

あの占い師に見せたどす黒いオーラはいつの間にやら消えていて、今は美しいだけのオーラが溢れ出している。

エルザイヌは後ろに数人の男を引き連れながら椿を誘導した。

(ベルバラに出てきそなお城…)

椿は恥ずかしげもなくきょろきょろと辺りを見回した。
確実に先ほどまでいたカラオケボックスとは空間が違う。
いつもの女子3人メンバーでいつものように遊ぶ予定だったのだ。
しかも今日は大学生の男が来ると期待して。
別に男漁りをしたい訳ではなく、椿の場合はタダで遊べるという期待なのだが。
そう考えると終息してきた怒りがまた沸々と湧いてきた。
せつかくのチャンスが丸潰れである。

「早く帰して」

説明しますと言われて誘導されているにも関わらず、その誘導の時点で焦れている椿は、相当の癪癱持ちだ。

しかしやはりエルザイヌは気になった様子はちりとも見せない。

「部屋はもうすぐですから」

「意味わかんない。帰るだけに説明なんかいらないでしょ」

ツンツンした椿の言葉の後に、背中に添えられた手に強く押された感じがした。

椿は怪訝そうな顔でエルザイヌを見上げる。

並んでみると意外と身長差がある。

椿は女性では一般的な高さなので、エルザイヌが高いらしい。

椿の頭がやつとエルザイヌの肩に届く程度しかない。

線の細い印象を受ける見た目だけに、やはりそれは意外だった。

「「」説明、させていただけますか？」

椿がそれに恐れを感じ、恐れを感じたことが不快だった。
先のようなどす黒いオーラ。

こうも近距離で真っ直ぐ向けられるとさすがの椿もぐうの根も出ない。

それでも少しでも反抗したくて、椿は小さく舌打ちをするだけにとどめた。

その時のエルザイヌの眉がぴくりと反応したことを椿は知らない。

○○*○○

無駄に広く豪華なその部屋には、銀色のテーブルを挟んだ向かい合わせのクリーム色のソファーと、その向こう側の大きな机がある。部屋の隅にはぎっしりと詰まつた本棚があるだけで、無駄な家具は一切ない。

社長室を西洋風に広くした感じだ。

大きな窓が2つ、陽当たりはとてもいいらしい。

「「」」は僕の職務室です」

エルザイヌは椿にソファーに座るよう促した。

特に断る理由もないのに素直に座つたが、椿の内心は反抗心でいっぱいだった。

先ほどのこともあってか、エルザイヌに敵対心を抱いている。

エルザイヌに金魚のフンの如くついて回った男たちは、1人の大男を除いて部屋には入つてこなかつた。

彫りが深く陽に焼けた浅黒い肌が男らしさを示しており、エルザイヌとは違ひどこまでも無表情だ。

椿がぽすんと音をたててソファーに沈むと、それを確認してからエルザイヌは椿の向かいのソファーに腰を下ろした。

大男は扉の前で立つてゐる。

「あなたのお名前は？」

「なんで答えなきやなんないの」

エルザイヌとは決して口を合わさずに椿は言った。
ここがどこかはこの際もつづりでもいい。

早く帰してほしい。

「話が進みません」

柔らかそうで、その実空氣は張り詰めていた。
意外とエルザイヌは短気なようだと椿は思った。

「進めれば？」

まるで他人事のように椿は吐き捨てた。

先ほどのように負けたくなかつた。

この優男に、この自分が負けるものかと、意地にも似たようなものが椿の中に芽生えている。

ケンカをすれば口では絶対に負けなかつた。

それをこんな訳の分からぬ場所で訳の分からぬ人物に崩されたくはない。

「どうやら姫長い説明は不要のようですね」

エルザイスもさすがにキレたらしい。

言葉こそ丁寧だが、棒読みといつのは否めなかつた。

それでも椿は田を呑わせない。

それどころか偉そうに腕組みをする始末である。

「あなたはこの国の“黒姫”として倭国から召喚されました。そして黒姫にはこの国の次期国王と契りを結んでいただきます。つまりその人とやるつことですね」

エルザイスの説明はかなりぶつ飛ばしたものである。

それは扉の前にいた大男が気付き、小さくため息をしたのは椿の知らぬところだ。

しかし椿が耳を疑いたかつたはある単語だけ。

黒姫とか意味は分からぬが、それは後でもいい。

倭国といつのも、まあいいだろつ。

「やあ…？」

意味が分からぬのではない。

自分が想像しているものが当たつてゐるのならば、それは相当に凄いことを言われたのだと思つ。むしろ当たつていて欲しくない。

「分かりませんか？いろいろ言ひ方ありますけど…、性行為…」

「わかつてゐるわ、バカ！」

椿は顔を真っ赤にしながら叫んでいた。

そんな言葉聞きたくはなかつたし、当たつてたことにも愕然とする。

その反応から椿は初なのだろう? と、いうことが容易に理解できた。

しかし椿の最後の余分がエルザイヌの不興を買つてしまつていた。恥ずかしそうに顔を真っ赤に染めている椿は未だ気付いていないが、エルザイヌの顔からはすっかり笑顔は欠如し、頬がぴくぴくと痙攣している。

「バカ……？」

底冷えするようなエルザイヌの声に、椿はやつと顔をエルザイヌへと向けた。

その顔はまだまだ赤い。

「俺に向かつてバカ?」

(お、俺……?)

さつきまでは確かに一人称は僕だつた。

椿の周りには自分のことを僕と呼ぶ人はいなかつたが、エルザイヌにはそれも似合つていたからなんとも思わなかつた。

しかし今は俺と言つた。

それが違和感がないようなエルザイヌの表情なものだから、椿はぽかーんとしてエルザイヌの顔を凝視していた。

「俺に向かつてバカとはどういう要件だろうね? 僕にバカと言えるということは、君は相當に自分のことを評価していることになるが」「は……?」

さすがの椿もすぐには反論できなかつた。

大した意味を持つて言つた訳ではなかつたので、エルザイスがここまで怒りを表すとは思つていなかつたのだ。

(怒つてゐる、んだよね…)

普通の人間とは怒り方がいまいち違つみうつだが。

「黒姫といえども、君の俺に対する態度は考え方ようだな。そもそも君は本当に黒姫なのか？ 瞳は良いにしても髪が…」

と疑わしそうにエルザイスは椿を見据える。

言われ放題は癪だ。

そろそろ椿の頭にも血が昇る。

「ヴラウンの何が悪いだよー今どき染めるなんて常識でしょー！？」

「常識？自分の髪を染めることが常識？」

心底信じられないといった風にエルザイスは顔を渋くした。

椿としては当然のことを言つたまでなので、そのエルザイスの反応に戸惑いを隠せなかつた。

もともと感情を隠すこととはしない質なので不思議はない。

「自分の髪を染めて痛め付けて、そのどこが常識だと思つのか理解に苦しむね」

確かに何度も染めている椿の髪は、毛先をはじめ痛んでいるといふ。

椿の場合染めるだけにとどまらず、巻いたりアイロンを掛けたりしているのだから余計だろう。

しかしそんなあからさまな嫌悪を向けられると、正じこじを言わ
れても反発したくなる訳で…。

「自分のものさしで人を測るんじゃねえよ」

怒ると口調は悪くなる。

椿自身自覚症状はあるのだが、直そうと思つたことは一度もない。
ケンカした時はその方が相手への牽制になる。
まあそれだけでケンカに勝てたら苦労はない訳だが。

「その口の悪さも常識か？ そ�だとしたら君の世界の常識はどこか
間違つているのでは？」

バカにしたように鼻を鳴らしたエルザイヌを、理性がなければグー
で殴るところだった。

先の柔らかい笑みはどこに行ってしまったのか。

このままこの意味不明な言い合いを続けてしまえば、椿の理性は簡
単に崩れてしまうだろう。

それをさせなかつたのが、新たなる人物が登場したからだつた。
ノックもないエルザイヌの職務室の訪問者は、エルザイヌ同様、銀
髪の少年らしい人物だつた。

ただその髪は肩先の短めである。

「黒姫様は！？」

明るい声と共に部屋へと侵入しようとした少年は、扉の前に立つて
いた大男にぶつかつた。

大層な身長差で、下手すればその少年は大男の腰までしかないんじ
やないだろうかと椿は感じた。

そこまではいかずとも、しかし少年は大男の腹筋に顔をぶつけてい

る。

「…スロー、何してるんだ」

エルザイヌはため息混じりに言葉を落とした。
どうやら呆れているらしい。

少年は「ごめん、ゼーレ」と小さく言葉を漏らして、エルザイヌへ
と顔を向けた。
そしてちびりと舌を出した。

「失敗失敗。黒姫様に恥ずかしいとこ見せちゃいましたね」

椿の胸がきゅーんとした。

(か、かわいい…！)

弟か、あるいは小動物のようだと椿は思つた。
その少年の愛らしさに保護欲をくすぐられる。
さつきまでのエルザイヌへの怒りはいつの間にか、少年への興味に
すり代わつた。

この少年になら黒姫と呼ばれるのも悪くない。

少年はエルザイヌから椿へと視線を向け、にこりと笑つた。
まだ男になりきらない、少年のあどけなさを残した笑顔が更に椿を
高揚させる。

「はじめまして、黒姫様。僕はスロー・レットと申します。スローっ
て呼んでくださいね」

もちろん呼びますとも!と、心中で親指を持ち上げる。
いつも愛らしくと自分の今の状況も忘れてしまいそうだ。

「控えなさいスローレット。今の状況が分からぬほど愚かではないだろ？」「

冷めたエルザイヌの言葉は、真っ直ぐにスローレットを射ぬく。どす黒いオーラとまではいかないが、有無を言わさぬ威圧感をもつていた。

せっかく椿の中に芽生えた光さえもエルザイヌは振り払おうとする。また椿の腹の虫が暴れ出しそうだ。

「冷たいヤツ」

部屋の空気は突然零下まで降下した。

○○*○○

エルザイヌは深い深いため息を、今日の、しかもこの一時間程度で何度もしたか分からない。

それもこれも大切に崇めなければならぬ黒姫のせいなのだから、ため息も一倍となってしまう。

（なんなんだ、あの黒姫は…）

姫と呼べる代物ではない。

それは確實だとエルザイヌは思った。

不細工ではないが、特別綺麗だったり可愛らしい顔立ちでもない。あれを月並みの顔というのだろう。

口調は男か、いや、悪く言って賊のようである。

あれを崇めるというのは無理がある。

選ばれてしまったのだから仕方ないとしても、あれを召喚した新人の預言者を疑わずにはいられない。

(ああ、新人預言者リーナ…)

彼女もまたエルザイヌの悩みの種の一つである。

預言者になつてそろそろ一年になるといつのに、いつもオドオドして、その威厳さえ感じられない。

力がない訳でもないのに、だ。

また実年齢よりも幼い顔立ちのせいが、余計に部下になめられやすい。

そのせいでいつまでたつても新人である。

しかし彼女がいくら新人だといっても、あの黒姫を召喚したのはどんな預言者でも同じなのだろう。

だから彼女に怒りを向けるのはお門違いな訳だが、いかんせん、思わずにはいられなかつた。

コンコン

控え目に小さなノック音の後、やはり小さく弱々しい女性の声がした。

また彼女の良からぬ噂が流れるかもしれないが、そんなのはエルザイヌの知つたことではない。

自分のやつた不始末だ。

エルザイヌはふうと一呼吸おいてから扉の向こうに冷たい返事をした。

2 (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

「うそでしょ！？」

椿は部屋中に響かせんばかりに声を張った。
目の前の少年は尚もくりくりとした目で椿を見つめるだけで、特に
撤回する素振りも見せない。

つまりそれは先の言葉を肯定していることになる。

「うそじゃないよ。あの人は正真正銘、僕の実の兄様」

確かに2人とも綺麗な顔立ちだと思うし、髪色も質も瞳の色も同じ
銀ではある。

しかし。

「似てない…。ぜんつぜん似てない！」

綺麗というだけで、パーツは似ていない。

目だけとつていえば、エルザイヌは切れ長だがスローレットは丸い
くりくりの目である。

最初の内であれば性格は似てると言えたかもしけないが、今となつ
てはとてもじゃないがそんなことは言えない。

椿のエルザイヌの印象は最悪だ。

それはお互い様な訳だが、あんな理屈っぽくて冷たい人間は、今まで椿の周りにはいなかつた人種である。
いなくて良かつたと椿は思った。
それに比べてこの少年スローレットは、純粋無垢、素直、そして愛
らしい。

どうしようもなく甘やかしたくなる。

これが兄弟だというのだから神秘だ。

まだ会つたばかりの兄弟に対し、椿はすでにそんな結論をつけていた。

「そんなに似てないかなあ？」

「うん。これっぽっちも」

思わず即答である。

それにスローレットはくすくすと笑みを漏らした。
あのエルザイヌはこんな笑い方はしなかつたはずだ。
きっと今までこれからもしないだろうと椿は思った。
というより見たくもない。

「エルザ兄様になんか言われたの？」

スローレットの問いに椿は顔を渋くした。

あんな爆弾発言をみすみす放つておけるほど椿の器は大きくない。
そのせいで説明もほとんど受けないままあの部屋を出てきてしまつ
ていた。

あの扉の前の大男は「黒姫」と声を上げたが、当のエルザイヌはどうぞと言わんばかりに椿を無視した。

1人あわてていたのがスローレットで、部屋を出していく椿の後を追
い掛けてきた。

そして「ならこっちに」というスローレットの誘導でこの部屋まで
行き着いたのだ。

なんでも黒姫もとい椿のために用意された部屋らしく、エルザイヌ
の職務室とはガラツと雰囲気の違う部屋だった。

白を基調にされた部屋は広く、ダブルベッドには天窓つき。
ホテルのスイートルームなんかはこんなのだろうと椿は思った。
庶民派な椿にしたら居心地が悪い。

しかし他にどこに行けばいいのかも分からないので、大人しくその部屋の白いソファーに沈んでいるのだ。

「エルザ兄様からあんまり聞いてないみたいだから、僕が説明するね」

この部屋に着いてしばらく、スローレットと椿は大分打ち解けていた。

それはこのスローレットが打ち解けやすい雰囲気を持っていたことと、椿のスローレットに対する警戒心がないからであった。そのせいでエルザイヌの時は突っぱねていた椿も、今回は黙つてスローレットの次に続く言葉を待つた。

「ここはダスティニーーーー国。そこそこな大国だよ
「ダスティニーーーー？」

聞いたこともなければ見たこともない。

高校で地理を選択していないからかもしれないが、大国であれば聞いたことぐらいはありそうなものだが。あいにくテレビでもその言葉を耳にしたことはない。

「椿の国は倭国つて言うんだよね？その国の人は黒い髪に黒い瞳を持つつて」

「まあ、一般的には…」

正確には日本だけど…。

言葉にすることなく心の中だけで椿は訂正した。

昔は日本のこと倭国と呼んでいたらしいし、大きな違いはないのだろう。

それよりも…。

椿が引っ掛けるのは黒い髪黒い瞳の方である。

この短時間で何度も言われたか知れないその単語たちは、椿からしてみれば当たり前の話だ。

そんなにごり押ししても…、てな感じである。

「それが？」

「うん。この国にはね、黒い髪と黒い瞳の両方を持つ人はいないんだよ。そのどちらかでも極めて稀だしね。黒い髪か瞳を持つ人は“闇神様に愛されてる”って言うんだ」

「やみがみさま…」

椿としてはいまいちピンとこない単語である。
しかしスローレットはそれを承知のことのようで、にこりと微笑んだ。
どこまでも可愛いそれに、そんな嘘みたいな話も少しばかり信じてしまつ。

「現在の国王の時も倭国人を召喚して、契りを結んでから国王に即位したんだよ」

（でた！契りを結ぶ！）

この愛らしいスローレットからはあまり聞きたくない単語である。
無理とは分かっているが、スローレットにはいつまでも子供らしくいて欲しいと椿は思つた。
もちろん自分のために。

「那人、今どこにいるの？」

同じ日本から来たのならば、説明を受けるならその方が断然話は早いだろうと椿は判断した。

しかしスローレットは可愛らしく「「フーん」と唸りながらあわつての方向を向いた。

「早く結婚したいって言つてたから、今『じゆ』那さん見つけて子供でも育てるんじゃないかなあ」

「は？」

椿の想像とはあまりにかけ離れた返答に、田が丸くなる。

てつくりこの城に在住していると思つたのだ。

しかしスローレットの話ではこの城にはいないだらう雰囲気が感じられる。

追い出したのか？

それとも案外簡単に帰れるのだろうか？

「ああ、呼んだんだから帰せるに決まつてゐるじやん」

と当たり前のように椿は声を上げた。

簡単なことぢゃないか。

自分にはできないから帰してくれと、ただそつ頼めばいいのだ。

そもそも世界から見たら小さいかもしけないが、日本にだつてかなりの人口がいるのだ。

その中から女性の、しかも自分と同じほどの年齢を抜粋したとしても、それは結構な数字になる。

どんだけの確率だったのか、今さら椿は呆れにも似た感情を示した。こづなれば自分の運のなさを呪つしかない。

「椿を倭国に帰せうと思えば帰せるけど、それは契りを結んだ後じゃないとダメだよ」

「な、なんで！？あつちには黒髪に黒い瞳なんて『ごろ』じゅこんじやん！別にあたし以外だって構わないでしょ？なんならそーゆーこと

に頼着しない子紹介するし！」

「黒姫が適当に選ばれてたんだつたら、そりしたいんだけど…。どうもそりじやないみたいなんだよね」

どこかすまなそりにスローレットは言った。

しかしその返答は椿にショックを与えるには申し分ない言葉である。つまりそれは椿にしかできないことで、椿の代わりは誰にもできないということだ。

しばらく反論もできないほどにはショックだった。

そんな椿の様子を伺いつつも、スローレットは話を続けた。

「契りを結ばなきゃ国王には即位できないから、この国にはどうしても黒姫を召喚しなきゃいけないんだ。それで、たぶん相手はエルザ兄様だと思つよ、今のところ…」

今のところ、とこりスローレットの言葉に椿はふと顔をそちらに向ける。

一番最初に会つた時に「僕の黒姫」と言われた記憶は薄々残っているので、相手がエルザイヌというのには特に驚くことはなかった。しかし今のスローレットの言葉はひどくあいまいだ。

そんな表情を椿がしていたのだろう、スローレットは苦笑して頷いた。

「実は今回はちょっと特殊で…。国王候補が4人いるんだよ。一番その座に近いのはエルザ兄様、その次は僕、そして叔父のシェンリルと、いとこのダッヂエス。本当なら黒姫召喚までに決定されてるはずだつたんだけど、今回は本当に異例なことだらけで…。決まりなかつたんだ、最後まで。だからいつそのこと黒姫に決めてもらいうと…」

「待て待て待て待て」

そこで思わず椿は制止の声を上げてしまっていた。

話は驚くべき方向へと向かってしまっている。

いつたいどこをどう考えたら女子高生に国王を選ばせようといつ答
えにいきつのか、椿には皆田見当もつかない。

国王といえば国の最上の地位といつのは、日本人の椿にでも分かる。
そう簡単に決められる話ではないのではないか？

それが国の命運を決めるのではないのか？

それとも国王とは椿の概念とは違い、ただのお飾りなのかもしだ
い。

だとするとそこまで悩まなくて良い気がしてきた。

だからと言つて見ず知らずの男に体を許す気には少しもなれない。
なぜ国王候補が絞れなかつたのかと椿的好奇心をくすぐつたが、あ
えて聞いたのはやめておいた。

「…」じつはよくわかんないけど、でもあたしにだつて事情
はあるんだからね

「うん」

「だから、その…、見ず知らずの他人とそーゆーことはできない」

恥ずかしくて言葉こそ濁した椿だが、スローレットにはそれだけで
伝わつたらしい。

スローレットは少し寂しそうな笑顔で小ちくつづいた。

「…やうだよね。突然召喚されたんだもんね。ごめんね…」

そう素直に謝られても、椿としては困つてしまつ。

かわいそつて責めることもできやしない。

エルザイヌであればズバズバと不平不満も言えたのだが。

それはエルザイヌが少しも悪哉れた様子を感じさせないからだ。

(感じさせないつていうより、微塵もなかつたんだろうけど)

あの皮肉な笑みを見せた美形の顔を思い出すだけで、椿の腹の虫が
疼きだすのだった。

3 (後書き)

スロー・レジストリーやメモリや書きやすいです。

なんでしょうね、この可憐らしいいじらしい青年は！

最後まで読んでいただきありがとうございました。

叔父のシェンリルといとこのダッヂエスを引きつれて、エルザイヌは黒姫の部屋へと向かつていた。

一応この2人も国王候補。

黒姫に会わせない、という訳にはいかない。

私事を挟んだ本心を言えば、この上なく会いたくないし会わせたくない人物たちである。

こんな立ち位置だからかもしれないが、この2人とは反りが合わない。

特に叔父のシェンリルは尚更だった。

プライドばかりが高く、そのくせ周りの貴族の傀儡人形の如く使われているのにも気付かない。

哀れな男だ。

変わつていとこのダッヂエスには大して言いたいことはない。

立場上相容れぬ仲になってしまったが、小さい頃は一緒に遊びすらした仲なのだ。

その内落ち着いて話したいと考えているが、そんな時間もとれないのが今の現状である。

というより、今はこれ以上問題を抱えたくないというのがエルザイヌの考えだつた。

もしあの黒姫がこの2人のどちらかを気に入りでもしたら…。そう考えると気も重くなる。

出来ることなら今すぐ回れ右をしたいのだが、そうもいかないのが今のエルザイヌの立場だ。

まだ弱いこの権力。

このままではダメなのだ。

強く、もつと強くならなければ。

(まだその期ではないが)

エルザイヌの心境は冷静であり、表面的な顔は笑顔そのもの。こんな特技を気付いた時から身に付けていた。

素直という言葉など、当の昔に置いてきてしまったようだ。

しかしそれをいとも簡単に崩されてしまったのがつい昨日のこと。普段向けられることのない暴言に、思わず怒りで返していた。

黒姫にも関わらず相当なことを言つた自覚がある。

冷静に戻つた今だからこそ思つことなのだから、昨日はどれだけ頭に血が昇つていたのだろう。

(ある意味才能か)

人を、更には自分をあそこまで怒らせることができるといつゝとは、褒める訳ではないが凄いことには変わりはない。

興味がある。

あんな人間が自分と出会つのは最初で最後だろうから。

「何か、聞こえないか…？」

いとこのダッヂエスの声に、僅かに背後を振り返る。

剣技にそれなりの心得のあるダッヂエスなので、常に五感を研ぎ澄ましているところがある。

その彼が言つのだから間違いないのだろうと思い、エルザイヌも耳を澄ましてみた。

またダッヂエスの表情が少なからず穏やかだったので、そう大したことでもないのだろう。

歩みを止めこそしなかつたが、よくよく耳を澄ませば何かが聞こえてきた。

なんとも表現し難い“何か”。

人の声なのだろうが、それはもしかしたら歌を唄つているのかもしれない。

馴染みのない、それどころか聞いたこともないようなメロディのそれを、エルザイヌが歌だと認識するのはかなりの時間を要した。またその声は近付けば近付くほど大きくなるものだから、嫌でもその発信源が分かつてしまつた。

目的地の部屋の扉は大っぴらに開いている。

恐らく空氣の入れ替えをしているのだろう。

扉の外に立つ2人の衛兵がエルザイヌたちに小さく会釈をした。

部屋には先日召喚されたばかりの黒姫と、年の割に幼いままの血を分けた弟、そして預言者リーナがいる。

3人ともまだこちらに気付いた様子を見せていない。

「倭國の音楽つて、こっちは全然違うんだね……」

「そう? これでもおとなしめのしつとりしたやつなんだけど…。童謡とかの方が馴染むかも」

そしてまた黒姫は唄いだした。

上手くもなれば下手でもない、やはり月並みである。

ただ不快ではなかつた。

今まで聞いたこともない馴染みのないメロディであるのだが、悪くはない。

「亀の話の歌?」

「そう。教えてあげよつか? あつちじや結構、有名なお話

「うん、聞きたい」

そつ言つてスローレットは目を輝かせる。

もう当の昔に成人の義を済ませたにも関わらず、スローレットからは青臭ささは未だ抜け切らない。

自分が国王となつたらスローレットに任せたいことが今よりもっと山積みになるだろう。

しかしこのままでは不安で任せられないではないか。そうなれば切り捨てるのみだが、心の置ける人物は1人でも多い方がいい。

「あつ……」

やつとエルザイヌたちの存在に気付いたのは、話にまつたく参加していなかつた預言者リーナだつた。

その声に話に夢中になつていた2人はリーナを振り返り、その視線を辿つてエルザイヌたちを見つめた。

「エルザ兄様！」

いらしたんですか、とスローレットが声を上げると、エルザイヌは不機嫌を綺麗に隠した笑顔で部屋へと入つていつた。

○○*○○

今朝一番に椿の部屋に来たのは、可愛らしい女性とスローレットだった。

「彼女はヒス。椿の侍女だよ」

ヒスはスローレットの侍女の1人だ。

まだ侍女としては若い25歳の彼女だが、仕事熱心で真面目なところがスローレットは気に入つていた。

真面目だがまだ若いので、頭が固すぎるということがない。

ヒスならば適応能力も高いから椿の世話も任せられるだらうと踏んで、彼女を推薦した。

ヒスはぺこりと椿に頭を下げ、一言も口を開くことなく水の入った洗面器を椿のいるベッドに置き、カーテンを開け放つた。

一見感じが悪く見えるが、規則上仕方のないことだ。

しかし椿はあからさまに渋い顔をしてみせた。

スローレットはそんな椿にすぐに気が付いた。

まだまだ短い椿との付き合いだが、彼女の性格は分かりやすい。

感情をまるで隠そうとしないのだ。

それはスローレットにとってまったく不快でなく、むしろ好感を抱けるものだった。

この城ではなかなかお目にかかれない人種である。

「じめんね。気持ちが悪いだらうけど、少しの間我慢してね。契りを結ぶまでは、その相手以外とは会話しちゃいけない決まりがあるんだよ。今回は異例だから、僕とエルザ兄様と叔父のシェンリルといとこのダッヂエスはいいつてことになつてるけど」

「はあ？」

どんな決まり？と椿が漏らした。

そんな素直な椿の反応に、スローレットも素直にくすくすと笑う。

「周りからの影響を受けないよう、って言われてる
「意味わかんない」

椿としては理解できないことなのだろう。

会話ができるとなると、その4人以外とは意思の疎通が取れないということになる。

考えるまでもなく、そんなことは椿には耐えられないとスローレッ

トでさえ容易に想像がつく。

「その不便な決まり、なんとかできないの？」

椿が聞くと、スローレットは困ったように微笑んだ。

昔からの決まり事を、スローレット一人の判断で破る訳にはいかないが、椿の気持ちが分からぬでもない。

最終的に自分よりも立場が上の人物に全てを委ねようと考えた。そんな自分をズルいと思う。

最終的な決定をいつも誰かに擦り付ける。

兄のように責任感の強い立派な人間になりたいとは思うが、それと同時に兄のような人間になりたいとも思わなかつた。簡単に人を切り捨てる兄を、寂しいと思う。

見習いこそそれ、なりたいとは思えない。

あの寂しささえ抜けければと思うが、その日が来るのはいつなのだろうか…。

来ればいい。

来て欲しい。

兄のためにも、自分のためにも、これからこのためにも。

(椿のためにも、かな)

唐突にくすくすと笑い始めるスローレットを、椿は顔を没くして見つめた。

不機嫌ではないのだろうが、それは人には不機嫌に見えてしまう。きっと本人は気付いていないのだろうが。

「エルザ兄様に聞いてみるといいよ。今日はシェンリル叔父様とダッヂエスと一緒に来ると思うから、その時にでも、ね」

そう言いながら楽しがつてゐるスローレットの内心は誰にも秘密のことだ。

兄があのよしに感情を表に出す」とはめつたになく、しかもそれが怒りの感情であれば尚のこと。

更に今回は兄と反りの合わない叔父がいるのだから、スローレットにはこれほどのないイベントだ。楽しまなければ逆に損である。

兄や椿には申し訳ないが、田一杯楽しませてもいいつもりだった。

そんな会話のすぐ後に、預言者リーナが部屋に姿を現した。相変わらずおどおどとした様子である。

椿がリーナに向かつて「あの時の子!」と声を上げたので、おどおどは更に増した。

リーナは優しい少女だ。

経緯はよく知らないが、規則であつても無視をする」といふ罪悪感を抱いているのだろう。

そのせいで召喚直後に椿と会話をし、エルザイヌから大玉玉を食らつたとスローレットは聞いていた。

哀れでならない預言者を、せめて自分の前にいる時ぐらいは助けてやううと、スローレットは口を開くのだった。

「預言者のリーナだよ。彼女との会話はエルザ兄様に許可を貰つてからにしてね」

椿がつまらなさうに舌打ちしたのを聞いて、スローレットは腹を抱えて笑いそうだった。

きっと兄にも同じことをしたのだらう、そう考えただけでじょりくは娯楽に苦労しなずにすみそうだ。

(面白いね、今回の黒姫は)

部屋にエルザイヌたちが侵入してきたことに、椿の目は自然と細められた。

先ほどまでは確かに楽しかった時間が、ものの見事に打ち砕かれた気分だ。

嫌いだ、どうしようもなく。

「こちらが叔父のシェンリル、そしてこちらが」とこのダッヂエスです」

最初は綺麗だと思った笑顔は、今の椿には胡散臭いものにしか映らなかつた。

この笑顔の裏では相当のことを考えているに違いない。

シェンリルと紹介された男は中年のひょろりとした風貌だった。

細い目が鋭く椿を捕えたまま口元をにやつかせている。

金髪の髪は決して風になびくことなく、ぴつしりと固められていた。まるでその人の性格を表しているようだ。

ダッヂエスという男は、とにかく大きかつた。

がつしりとした肢体にエルザイヌよりも高い身長は、それだけで人に威圧感を与えた。

シェンリルと同じ金色の髪は、短く揃えられている。

スローレットを抜いて考えれば、椿としてはダッヂエスが一番接しやすそうだと感じた。

2人が同じように椿に礼をすると、椿も反射的にではあるが頭だけを小さく下げる。

「少しお話でもなさいましょ」ついで、黒姫

シンリルがついつい前に出て椿に近づく。
椿はそれをぴしゃりと言葉ではねのけた。

「今スローと話してたんで、また次回つてこと

あまりこの男は好きではないと、直感的に思った。
何が、どこがと聞かれれば言葉に窮してしまつが、しきて言えばこの顔付きだらうか。

隠そうとしている裏事情がどことなく見え隠れしている。
エルザイヌのように綺麗に隠しきれていた方がいいそ清々しい。
その椿の言葉に、シンリルは苦々しい顔をした。

(ナーナーといだつてば…)

いつか口に出してしまってやうだった。

4（後書き）

遅い投稿申し訳ありません。

新登場人物が多くなりすぎないようといつ方向性に持つて行きたいです。

しかし予定は未定です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

「どこか不貞腐れたような、そしてまたどこか意氣消沈したよ！」
ショーンリルは部屋をふらふらと退室していった。

椿の反応がよほど堪えたらしい。

椿自身それに気付いていたが、どうしようもなかつた。
元からどうしようとも思つてなかつたのだが。

ダッヂエスはぽかーんとしながら椿を凝視している。

しかしそんなダッヂエスはお構い無しに、椿はエルザイスに向き直つた。

エルザイスはどことなく素に近い笑顔を浮かべている。

「ちょっと相談があるんだけど」「なんでしょう？」

素の笑顔から一変、素晴らしいまでの笑みを椿へと向けるエルザイス。

この猫かぶりめ！

と心の中だけで毒づいておく。

口に出さないのは、この綺麗な笑顔に押し返されてしまつたからだつた。

不覚にも心臓が大きく脈打つた。

（嘘笑顔なのに…！）

そんな自分に腹が立つ。

純情な女を氣取るようなキャラでは全くない。
面食いでもない。

なのに今の動悸はなんなのだ。

自分に向いていた怒りが、なぜだかだんだんと田の前のエルザイヌへと移行していく。

「…いろんな人と話したい。アンタたちだけじゃなくて「できません」

エルザイヌはバツサリと椿の提案を切り捨てた。

視線の端でダッヂチェスがびくっと体を震わしたのが見えたが、椿はまったく意に介さなかつた。

あまりの即答の速さに椿でさえも面食らう。

やはり好きにはなれそうにもない。

「す、少しぐらい考へなさいよっ！」

「考へるまでもありません。規則ですか？」

「そんなん知らないいつのーこのままじゃ不自由なのー！」

「不自由だとお感じになるのでしたら、お早く契りを…」

「わーーーーうるさいばか！変態ーーアンタの頭にはそれしかないわけ！？」

言つてからはつとした。

言い過ぎたかもしない。

エルザイヌの頬が痙攣したように笑顔のままぴくついたので、そう思わずにはいられなかつた。

しかし出してしまつた言葉を戻すこともできないし、変な意地から撤回することもしたくない。

椿はじくつと喉を鳴らしてエルザイヌの出方を待つた。

「なぜそんなに契りを結ぶ」とを拒否なさるのですか？」

そもそも当然のことのようにエルザイヌは椿に問い合わせた。

わざと聞いているのならただ性格が悪いだけで済むのだが、本氣で
聞いているのだとしたら質が悪い。

これではまるで愛情の知らない子供ではないか。

と、そこまで考えて椿はエルザイスから視線をそらした。

（あたしだってそんなに愛情とか知らないじゃん…）

親は自分をほとんど放任していた。

頭を撫でられた記憶も、優しく抱きしめられた記憶もない。

ケンカすらもしない。

ずっと「ハニケーション」に「ハニケーション」をどちらいま
ま来てしまった。

学校行事は当たり前の如く欠席。

面談などの「どうしても欠席できない行事」の時は顔を出す程度は
したが、当たり障りのないもので終わっている。

自分がどんな選択をしようと、一切口は挟まなかつた。

小さい頃は周りが羨ましくて寂しくも感じていたが、さすがにその
年齢は越している。

中学生あたりから、周りが賑やかなうそれで良かつたと思えた。
家に居場所がなくとも、自分には外に居場所がある。
明るくて賑やかで楽しい居場所。
だから何も寂しくなんかない。

無断で外泊しようと、帰りが遅かるうと、「警察沙汰だけはやめて
ね」と言うだけで、咎めたりはしない母。

だから逆に「そっちもね」と返すと、「そうね」と返してくる、絶
対に怒らない母。

ほとんど顔も合わせない父。
子供を愛さない両親。

「そんで横道それた子供つてか」

「はい？」

「別に」

あんな風にはなりたくない。

自分にとつてあの両親は反面教師だ。

だからそういうことは心から愛した者だけしたい。

そんな自分は子供染みているのだろうか？

「椿、どうしたの？」

大丈夫？と横から顔を覗き込んできたスローレットに、小さく笑みを向けた。

ここに来てスローレットだけが椿の支えである。

ここでは誰よりも常識人だと感じる。

椿は気を取り直してまたエルザイヌへと視線を向けた。
もちろん鋭い目線であるのは言つまでもない。

「アンタとそーゆーことは死んでもやらない。アンタだけじゃなくて、アンタとも、さつきのオヤジともぜえつたいやらない！」

椿はエルザイヌ、次いでダッヂョスを指差し、ぎゃんぎゃんと喰いたた。

その椿の言葉の後数秒時が止まり、それをぶち壊すかのようにダッヂエスとスロー・レットが声を上げて笑い始めた。

ダッヂエスは腹を抱えて笑い、スロー・レットは目に涙までも浮かべている。

目の前のエルザイヌは椿から視線を反らし、口元を手で抑えながら肩をフルフル震えさせていた。

これはもしかしなくても笑っているのではないか？

「ちよ…、なんのよアンタたち！」

理由がわからない状態で言つてはみたが、当然笑いの渦が治まる訳もなく。

唯一その渦に乗り切れてないリーナは、ぽかーんと口をあんぐり開けた状態だった。

可愛い顔も台無しである。

「おま…、ほんと…！それはない！それはないだろ！」

「は、はあ？」

「椿…！もう…、本当にかわいいね」

「はああ…？」

笑いながらのスローレットの言葉に、理解はできないが赤面してしまった。

普段「かわいい」などと言われる「」とはないに等しいのだから、そんな初な反応をしてしまひ。

それが更に3人を煽つてしまひのだが。

「な、ななな…！なんなんだよつ…！」

いい加減イライラの最高潮に達した椿が、叫び出した。

それにはさすがに3人も笑いを抑えよつとした。

しかし突然抑えきることができたら苦労はない訳で、喉の奥がくつくつなつている。

椿が3人を流すように睨み続けていると、目尻にたまつた涙を拭きながらスローレットが口を開いた。

「『めん』めん。椿があんまりかわいい」と言つんだもん。ほんと、かわいい」

「かつ……れ、連発しなくていいから！」

耳まで赤く染めた椿に、スローレットはまたしてもくすくすと笑いを溢す。

いつの間にかダッヂェスは、椿に対しての壁がきれいさっぱりなくなっていることに気が付いた。

○○*○○

「黒姫っていうのは、あんな初なものなのか？」

笑いを含んだダッヂェスの言い方に、エルザイヌは口の端を自然と持ち上げた。

言葉の悪い低俗な輩かと思えば、耳まで赤く染めた今どき珍しい初な反応。

綺麗だな、と思った。

純粋と言つてしまえばそれまでであるが、それだけではない気がするにはなぜだろう？

黒髪と黒い瞳を除けば姿形はあまりにも人並み、しかしどういう訳か自分を惹き付ける。

あんな人間を自分は知らない。

だから興味が湧くのだろうとエルザイヌは思考を切り替えた。

「ダッヂェス、率直に聞いてもいいかな？」

ニヤニヤしていた表情は一変、真面目な顔を張り付けたダッヂェス。エルザイヌはそれに満足げににこりと微笑んだ。切り替えが早いことは話がスムーズに進むのだ。

「君は国王になるつもりがあるのかい？」

率直に言つとは言われたが、ここまで率直だとは思つていなかつたダッヂエスは目を開いてたじろいだ。

エルザイス自身も表面には分からぬが、内心では驚いていた。ダッヂエスと話がしたいとは前々から思つていて、今回はシェンリルもない最高のチャンスだつた。

だからさつさと本題に入ろうとはしていたが、まさかこんな裏表のない問い合わせ自分がから出るとは、自分でも予想外の出来事だ。これがあの黒姫の純粋さの影響なのだとしたら、自分は意外と影響されやすい人間なのかもしぬれない。

「また随分と…、ストレートだな…」

「回りくどいのは君らしくないだる?」

と、それらしい理由を述べてみる。

ダッヂエスは「確かに」と言つて苦笑した。
もしダッヂエスが「なりたい」と言つた場合、この状況はかなり不味いだろう。

この筋肉質のダッヂエスに襲われたら一溜まりもないのは火を見るよりも明らかだ。

しかしエルザイスには確信があつた。

「変わらないな、エルザは」

そう言つて頬を緩ませたダッヂエスに、エルザイスも素の柔らかい笑顔を浮かべることができた。

そして自分の勘にも近い確信が正しかつたと理解した。
誰にも渡せないあの座席。

そのためならなんだつてやるし、やれる自信がある。

それでも対象にできる人物としたくない人物がいるわけで、ダッヂ
エスは後者だつた。

しかしもしダッヂエスの返答が自分の意にそぐわなければ、躊躇な
しで対象にする自信もあるが。

「国王といつう役職には興味はないんだ。はつきり言つて、周りが盛
り上がりぢやつてつていうか…」

ダッヂエスは照れたように後頭部を搔いた。

このよだんな素のダッヂエスは、王族どころか貴族らしい雰囲気があ
まりない。

だからこそ自分はダッヂエスに好感が抱けるのだろうと思つた。

「だから今回の黒姫召喚で任が解かれるとも思つたんだが…。あの
黒姫じや時間が掛かりそうだな」

言葉の割には楽しそうな表情のダッヂエスに、エルザイヌは心の中
で同意した。

時間は掛かるだろう。

早く国王の座を得たいが、あの黒姫を無理やり組み敷きたいとは思
わない。

ならば気持ちを持たせればいいのだ。

それすらも時間が掛かりそうではあるが。

「国王の座は僕が引き受けよ。けれど、黒姫の心を紐解くのは手
伝つてもらいたい」

ダッヂエスに頼むのは根本的に間違つてゐるよつて見えるが、信用
の置ける人物としては最上の男だろう。

利用できるものは全て利用する。
それが自分のやり方だ。

「ほんと、変わらないな」
「讃め言葉として受け取つておくれよ」

変わらない、変われない。
そんな自分を良く思わないからあの黒姫やダッチェスに惹かれるの
かもしれない。
その時どこから吹き込んできたのか、銀色の自分の髪がサラサラと
風に流されて輝いた。

5 (後書き)

更新が遅くなり、誠に申し訳ありませんでした。
ダッヂエスくんぶつちゃけましたね。
なんだかこの話は逆ハーを田指したいらしい。.

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

「エルザイスがいって言つたから、あたしと喋つちやつていいいんだよ」

椿がそう言えば、皆が「ああ、そうなのか」とあつさり納得の言葉を吐いていた。

椿自身、ここまであつさつだと拍子抜けだつたため、ならばと会つ人会う人にその嘘をつきまくつた。

そうなれば次の日に呼び出されるのは当然の事態であつて。エルザイスの職務室でふてぶてしいまでの態度で現れた。

悪哉れた様子を一切見せない椿だが、その心の内では申し訳なさでいっぱいだった。

エルザイスに負けた気がするのでツンケンした態度で立ち向かっているが、嘘をつくのはやはり気持ちの良いことではない。

まだ出会つて日が浅いというのに、その椿の心情が手に取るよう理解してしまうエルザイスが、更に椿のイライラを増させていた。

「嘘をつるのはいけませんね、椿」

「……」

「しかも取り返しのつかない、質の悪い嘘だ」

「……」

どうしてこの男は「う、人を追い詰めるような言い方しかできないのか。

思つが口にできないのは、エルザイスが間違つたことを言つていなければいいからだ。

分かつてこるから更にイライラは増していく訳だが。

しかし呼び出した割にはそこまで怒っている感じではないエルザイヌが不思議だつた。

「でもまあ、いいでしょ」
「え？ いいの！？」

思わずエルザイヌへと視線を向けると、にこりと微笑まれ、しまつたと思つた。

これではエルザイヌの思つっぽである。

椿はすぐにエルザイヌから視線を外した。

「ただ女性限定です」
「…なんのために」
「決まつてるじゃないですか。あなたが俺以外の男に惚れないうにです」

椿は口から火が出るんじゃないかと感じた。
この男のこのセリフは本心なのだろうか？

叫び出したい。

歯が浮く台詞とはまさしくこれだと椿は確信した。

極力関わりたくないと思うのに、エルザイヌを避けて通る道がどうしても見つからない。

親でさえ上手く避けて通れたのに。

「俺もだいぶ妥協したので、その程度は守つていただけますね？」

このいちいち突つ掛かるような言い方はビリビリかならないのだろうか？

椿は重く深くため息を落とした。

「…別に誰にも惚れたりしないし。アンタにも

誰にも惚れたりしない。

いや、できないのかもしね。

親にさえ愛されなかつた自分が他人に愛されるとは思えないし、もし愛されたとしても自分は愛せない気がしてしまつ。

愛し方がわからない。

そこまでエルザイヌに言つてやるつもりはないが。

エルザイヌはにこりと微笑みを椿に向けただけで、それ以上は何も言わなかつた。

○○*○○

椿はエルザイヌの職務室の扉を締め、深く重いため息を長くはいた。
認めたくはないが、あの男は非常に手強い。
果たして自分の手に負えるのだろうか？

「大きなため息ですねえ」

椿が声のした方を振り返ると、昨日知り合つたばかりの顔があつた。扉とは反対側の壁に背中を預けており、椿を面白そうに見つめている。

「昨日の…、ダッヂエスだつけ？」

「お、覚えていただけましたか」

ダッヂエスはからからと笑い、壁から背中を離した。

そのまま自然に椿の隣にダッヂエスは立つたが、椿はあからさまに

不信気な顔をしてみせた。

エルザイヌとダッヂエスとシェンリルの中で誰が一番取つつき安そうと言えばダッヂエスだが、それはあくまでその三人で選べばの話。まだまだ知らない人間だ。

「そんな警戒しなくても取つて食つたりしませんって
「誰もそんなこと思つてないっつのー！」

そしてダッヂエスは人の良さそうな笑顔になつた。
悪い人ではなさそりだと思つた。

この手の男友達ならばあちらにはたくさんいた。
接し方ならだいたい掴める。

「まあいいわ。それよりも、その気持ち悪い敬語はなんとかなんないの？」

「あ？ 気持ち悪かったか？」

「うん。めちゃくちゃ」

そしたらダッヂエスはまた笑いだした。スローレットとはまた違つた接しやすさがダッヂエスにはあつた。
これぐらいがちょうどいい。

「これでも生まれてこの方、ずっと貴族だぜ？」

「ふーん」

「はは。今回の黒姫は反応薄いなー」

ダッヂエスはまた声をたてて笑うので、椿はよく笑う奴だとダッヂエスを見た。

逞しい身体に似つかわしくない人懐こい笑顔。

そのギャップにやられる世の女性は少なそうもない。

もし自分の周りの女友達であれば、まず間違いなく放つてはおかないはずだ。

「その黒姫つてのもイヤ」

「わがままばつかだな」

「うつむき。勝手に連れてきて言えた立場じゃないでしょ」

ダッヂェスが小さい声で「確かに」と納得の言葉を漏らしたので、椿は心の中で吹き出した。

素直だ、見た目に反して。

椿はダッヂェスと共に自室までの道のりをなんだかんだで楽しく過ごした。

自室に着くとダッヂェスが「じゃあ」と片手を上げたので、椿はきよとんとしてダッヂェスを見返した。

「そういうえば、あたしに何か用だつたの？」

わざわざエルザイヌの職務室の前で待ち伏せするぐらいなのだから、きっと何か用事があつたのだろう。

今さらな質問ではあるが、気になつたので椿は口にした。

ダッヂェスは小さく笑つた。

「本当はエルザに先に言つつもりだつたんだが、まあいいか」

「なに？」

「データをセツティングしここでやつたぜ」

「……は？」

楽しそうな笑顔を向けてくるダッヂェスの前で、椿は間の抜けた表

情をダッヂエスに押ませた。

○○*○○

エルザイヌは机上にある資料から顔を上げ、楽しそうに微笑むダッヂエスを凝視した。

そのエルザイヌの表情だけでダッヂエスは満足だった。
いつも完璧なまでの嘘笑顔を振りまくエルザイヌの表情を崩すこと
は、なかなかに難易度の高いことだ。

それができただけでもう達成感で溢れている。

「…デート？」

「ああ」

「…一応聞くが、誰が？」

「エルザが」

「…誰と？」

「黒姫…じゃなくて、椿と」

エルザイヌは頭を抱えたくなった。

ダッヂエスのことは信用はしているのだが、どうもストレートすぎると言うか、バカと言うか…。

頭痛の種と言える発言である。

認めたくはないが、このバカストレートに黒姫の心を紐解く手伝いを頼んだ自分がバカだったのかもしれない。

「…なんでそういう考えになるのかな…」

さすがのエルザイヌもこの精神状態で仕事を続けることも適わない

ので、ため息を落としつつ椅子の背もたれに身を預けた。

ダッヂエスは憂々とした表情でエルザイスの職務机へと近付いた。

「契りを結んでもいいって思うには、やっぱお互いがお互いのこと

を知る必要があるだろ？でもここじゃ椿があの調子だし、だつたら

ちよつとぐらい遠出して気分転換なんかどうかなーと思つてさ」

「…言つてることは正しいけど、現実味がないな。今はただでさえ仕事が山積みなんだ」

エルザイスが机上の高く積まれた資料の山を見据えた。

これだけならまだしも、やらねばならないことはまだまだある。

国王がいない今、国王の仕事の大半はエルザイスがこなしている。

それが前国王の遺言であり、エルザイスがそれを受け入れたためだ。こなしてもこなしても、仕事はなくなったりはしない。

むしろ増えていく一方だ。

そんな状況で旅行なんかしている場合ではないというのは、いくらバカでも貴族の、しかも王家のはしぐれであれば分かることなはずだ。

ダッヂエスは職務机に両手を置き、エルザイスに詰め寄った。

「だからだ。別に田帰りでいいんだよ、そんなの。言つてるだろ？
これは単なる気分転換であつて、ちよつとしたコミュニケーションの場だ。データツリーのは、基本的に田帰りつて決まってんだよ、やらなきゃな」

思わずエルザイスは苦笑した。

どことなくダッヂエスと椿に似通つたところがある気がした。

「ところでダッヂエス」

「ん？」

「こつの中に黒姫とそんなに仲良くなつたんだい？」

軽く流しても良かったのだが、参考までに聞いておこうとHルザイヌは質問を投げ掛けた。

ダッヂエスは先ほど、椿のことを「椿」と名で呼んだ。それも黒姫と呼んだところをわざわざ変えての椿だ。ダッヂエスは机から手を離し、からからと笑つた。

「なんかさ、俺、椿の男友達に似てるんだけど

どうも参考にはなりそうもない。

パート 1（後書き）

「データ編に突入しました。

これまで少しあは椿とエルザさんの絡みが増えるといいんですけど…。

遅い更新申し訳ありません。

ご意見・ご感想・評価お待ちしています。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

ダッヂェスの話を聞いたスローレットも、それはそれは楽しそうに話に乗つかった。

その様子を見た椿は、げんなりとスローレットを見つめる。

「誰が行くって言つた？」

「あれ、行かないの？」

行くわけないだろ！と叫びたい気持ちを抑え、代わりにため息を落とした。

なにが嬉しくて苦手な人間とデートなるものをしなければならないのか。

どう考へても理解できない。

「そもそも、あの男が断るんじゃないの？」

椿の中で、エルザイヌという男がその話をよしとするとは思えなかつた。

あの男は感覚ではなく、仕事だつたり役目のために動く人間だと感じている。

動きの一つ一つが計画されたことのよつた、無機質なロボットのようだと椿は思った。

また麗しい姿形をしているため、それはなおさらだ。そんな男がデートなど、不釣り合いにも程がある。

「エルザは俺が説得済み」

ダッヂェスが部屋の壁に身を預けた状態に得意気な顔でそんなこと

を言つたものだから、椿の額に青筋がたつた。

説得したこと、説得されたことも気に食わない。

「今まで自分に嫌がらせをすれば気が済むのか。

「行つておいでよ、椿」

「他人事だと思って適当に…。あたしはある男が好きじゃないの…」

そんな男とデートなんて、考えただけで鳥肌もんだつつの」

そう言つて、椿は大袈裟に身震いをしてみせた。

スローレットやダッシュエスがいるならまだしも、二人でなんて冗談じゃない。

二人が来たとしても、素直に領けるかは疑問だが。

「そんな頑なになるなよ。エルザを知るいいきつかけになるし」

「別に知りたくない」

「それに！椿は城の外に出たことないだろ？ 出てみたくないか？」

と、ダッシュエスからの誘惑の言葉が掛かると、椿はあっさりと頑なな心が折れそうだった。

出たい。

この狭い空間から出てみたい。

そう言われてみれば、まだこの城内でさえも一人きりでは自由に歩くことさえままならないのだ。

それが「アブつきではあるが、外に出ることを許された。

それは相当な進歩じゃないか？」

「僕も前から思つてたんだけど、黒姫つて国のために存在するのに、この国のこと何も知らないで使命を終えて帰っちゃうんだよね。

それっておかしいなって思つてたんだよ」

先ほどまでの楽しそうな笑顔から一変、スローレットは真剣そのものの表情でそう言った。

確かにスローレットの言つ通り、椿がその行為に頓着しない性格であつたのなら、契りを結んでさつさと日本に帰つていただろう。長々とここに居座る理由などないのだ。

だから知らなくてもなんの支障もきたさない訳で、ゆえに教えようという機会さえなかつたのだろう。

黒姫に求められるものは知識や技術でなく、その行為のみなのだ。椿としてはそのことになんの依存もなかつたのでスローレットの意見に賛同している訳ではないが、城下町なるものに興味はあつた。城がこんなに西洋風に豪華なのだから、城下町も西洋風な気がする。メルヘンな性格ではないが、やはり女には変わりない。

(外国に来た気分。って、一応外国か…)

椿は悩みに悩み、結局二人の説得の甲斐あつて首を縦に振つた。

○○*○○

(二人じゃないんじやん…)

初めての乗馬のことよりも、背後で同じよひに馬に乗り込む数人の男たちを見て椿は思つた。

でも、と椿はその男たちを凝視した。

いつぞやのエルザイヌの部屋にいた男もそつだが、屈強そつないかつい男たち。

次期国王と言われる男に、護衛の一人や一人いたつておかしくない。むしろいなきやおかしい。

(護衛を付けなきや いけないぐらい大変なら断れよつての)

承諾した自分を棚に上げ、椿は不機嫌そうに騎乗のエルザイスを睨み付けた。

ただ馬に乗っているだけなのに、どうしてこの男はこんなにも絵になるのだろうか？

エルザイスが乗る黒い馬は椿を見て小さくいなないた。

「不満そうな顔ですね」

「べつにい？」

言つてそっぽを向いてやると、エルザイスはくすくすと笑つた。この余裕の笑みが椿をイライラさせると氣付いているのかいないのか、エルザイスは気にすることなく椿に手を差し出した。

「…なに」

「乗らないのですか？」

「は？ なんであたしがあなたの馬に…」

椿がそう言つて渋ると、エルザイスはきょとんと不思議そうに椿を見返した。

「椿は馬に一人で乗れるのですか？」

「いや、乗れないけど…」

「ならば誰の馬に乗るつもりなんですか？」

「べ、別にあんたのじゃなくたつていいじゃん」

エルザイヌは「おや」と大袈裟に驚いた顔をしてみせた。
そのまま後にくすりと微笑みを溢した。

「僕は『テート』といつもの、一人が同じものを同じように共有する
ものだと思っていましたので、椿は当然僕の馬に乗ると考えていたの
ですけど」

エルザイヌが言っていることは間違っていない。

だからこそ椿はその端正な顔を殴り飛ばしたい衝動に駆られる。
いつそ黙つてさえいってくれたら、もう少しさは違つた対応もできたの
だろうが。

とにかくにも、もう逃げられそうもないと確信した椿は、エルザ
イヌの手を借りながら馬にまたがつたのだった。
もちろん辺りに響くぐらいの舌打ち付きで。

ゆっくりと歩く馬。

さらさらと心地の良い風。

美しい草原の中の一本道。

申し分ない環境であるはずなのに、椿は居心地が悪くて仕方がなか
つた。

初めての乗馬は置いておくとして、何が嬉しくて好きでもない男の
腕の中に收まらないといけないのか。

しかも、それを数人の男たちに見られているのだ。

(あたしは見せ物じゃないいつの)

椿は早くも怒りの沸点に達しそうなことを感じた。

その時、背後でくすりと笑う声が聞こえたので、椿は顔だけを振り

向かせ、想いの限りにその端正な顔を睨み付けた。

「あ？」

「いや、そろそろかなと思つて」

「なにが」

「椿が怒りだす頃」

馬の上でなければ、恐らく平手打ちぐらいはお見舞いしていたかもしれない。

わざわざ言わなくてはならないことか？

それが更に自分を煽るとは思わないのか？

「…あんた、本氣でムカつく」

「お褒めに預かり光栄です」

「…黙れ」

「椿も口を閉じた方がいいですよ。舌を噛みます」

エルザイヌの言つた意味が分からなかつたので、椿はもう一度エルザイヌを振り返つた。

どきりと、いつぞやにも感じた脈の唸りを椿は感じた。

エルザイヌはいたずらう子のような笑顔で椿を見下ろし、そつと耳に顔を近付けた。

「ここの先の森に入つたら馬を走らせる。だから俺の腕をしつかりと
掴んでおいて」

周りには聞こえていないであろう声音でエルザイヌは言った。

しかし説明不足にも関わらず、椿の質問は一切許されなかつた。
なぜなら、もうすぐ森というより目の前はもう森で、椿が言葉を發するより早くにエルザイヌは馬を走らせたからだ。

なので椿は必死に掴まつて いることしかできず、唯一できたことは、馬が走りだした直後に「エルザイヌ様！」という背後の数人の男たちの悲痛の叫びのようなものを聞くことだけだった。

2 (後書き)

意外とやんぢやなエルザイス兄弟でした。
そして、このパートはいつたこぢつなることやい。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

不本意ではあつたが、今までに味わつたことのない振動と騎乗の不安定さで、知らぬ内に椿はエルザイヌの腕にしがみついていた。馬がゆっくりと走りを終えても、まだ揺れている感覺に襲われている。

映画やドラマなどで優雅に乗馬をしている俳優たちの苦労が分かつた気がした。

馬に他意はないが、嫌いになりそうだ。

「つまく撒けたみたいだ」

エルザイヌは満足気な声を上げ、椿の顔を覗き込んだ。
その顔はどこか青白い。

「大丈夫？」

「…んな訳ないでしょ……」

自然と低い声が飛び出たが、相手がエルザイヌといふこともあって別段気にした様子はない。

そんな椿にもいよいよ慣れてきたエルザイヌは小さく笑い、「お疲れ様」と軽く言ってのけた。

「せつかぐのデートだし、邪魔は嫌だろ?」

口調が変わつてやしないか、と思う椿だが、面倒なので黙つておく。
どうせこの男は誤魔化すに決まっているのだ。
特に知りたくもないし。

エルザイヌは椿から視線を外し、前方を眺めた。

椿も釣られるようにそちらを見ると、森の中に静かに存在する湖が目に飛び込んだ。

幻想的とも言える光景に、椿は小さく息を呑む。

向こう側まで見える程の小さな湖は、陽の光をキラキラと反射させ、水面に虹色を浮かび上がらせている。

少しの風でも揺れる水たちは、まるで生きているかのように踊った。椿は黙り込み、食い入るようにただただ湖を見つめた。

エルザイヌはひょいと馬から飛び降り、支えられながら椿も馬から降りた。

支えられなければならないことに反発をしてもよかつたが、今はこの幻想的な気分に浸っていたかったので、椿は口をつぐんだ。

「小さい頃は城を抜け出して、よくこの湖に来ていた」

馬の紐を木に括り付け、エルザイヌは湖の近くにそのまま腰を下ろして話し始めた。

エルザイヌが「座れば?」と言つ風に自分の隣を促したので、椿はそこから少し離れた場所に座つた。

エルザイヌはそれを見て少し笑つたが、頑張れば手の届きそうな位置に座つたのは、椿の精一杯の譲歩だった。

「当時はまだ国王になりたいなど、これっぽっちも考えていなかつたな」

エルザイヌがいつたい何を言いたいのか、椿はいまいち分からないので、相槌も打たずにいた。

一人になつた途端に化けの皮が剥がれたようだ。

「たまにスローも連れてきたが、あいつは遅くてね。すぐに見つかってしまうから、ここにスローを連れてくるのは好きじゃなかった」

話の趣旨がまったく見えてこない。

しかしエルザイヌの表情は作り物ではなく、素の笑顔のよつに見えた。

「昔話をしにきたわけ？」

「いや。椿をここに連れて来たかつただけだ」

づくり

と、またしても心臓が自己を主張した。
いつたい自分はどうしてしまったのだろう?

こんな口先だけの男に…。

思うだけで、椿は拒絶の言葉を吐くことができなかつた。

「椿といふと不思議な気分になる。國の頂に相應しいよつ自分で作つた殻を、椿はいとも簡単に割つてしまつんだ」「殻……」

椿がエルザイヌを見ると、端正な横顔が伺えた。
きらきらと煌めく髪が、エルザイヌの顔を優しく撫でる。
言葉の割りには楽しそうに笑うエルザイヌが、今はなぜか眩しく見えた。

(いつも眩しいよつな氣はするけど……)

「不思議だ。これが黒姫の力なのか」

エルザイヌは自問するよつに言い、そして笑つた。

エルザイヌは先から椿のことを「不思議」と言つたが、椿も不思議に思つていた。

この湖に着いてから、エルザイヌは恐ろしく大人しい。

そして素だ。

この湖がそうさせているのか、あるいは自分が大人しいからなのか。
そう、なぜか自分でも今の自分は大人しいと思う。

その理由は簡単だ。

エルザイヌが素のようだから。

「いつも今みたいにしてればいいのに」

小さく呟いたつもりだったが、エルザイヌには聞こえたらしい。
エルザイヌは椿を振り返ったが、視線を合わせたくないで、椿は湖を見つめた。

「どうして？」

「あたしは猫被りも嘘つきもキライだから」

椿が言うと「なるほど」とエルザイヌはくすくす笑った。

「椿に嫌われたくないし、椿の前だけでなら努力してみよう」

椿には嘘か誠かの判断は難しかったが、真実だつたらいいなと椿は思つた。

理由は考えないことにした。

○○*○○

エルザイヌとの他愛もない話は、何度も椿を笑わせることに成功した。

こちらに来てまだ日が浅い椿だが、スローレットやダッヂェスとは

違う何かをエルザイヌの中に見出だしていた。

それは安心感にも似たようなものなのだが、椿はその感情に名前をつけることができなかつた。

知らないだけなのか、知りたくないのか。

椿自身は両方だらうと結論付けた。

今はまだ知らなくてもいい。

知らないままの方がうまくいくことだつてある。

そう自分に言い聞かせて。

「そういうえば、あの女の子。えっと……、リーナ？ その子にもうちよつとぐらい優しくできないの？ アンタに対してもう少し怯えてるみたいだし」

こちらに来てから椿は何度かリーナと過ごす時間があつた。
いつも人より一步後ろにいるような控え目なタイプのリーナは、椿が元いた世界で出会つていたなら、あまり接点がないタイプである。まだ仲が良くなつたとは言えない椿とリーナだが、お互いの性格はある程度把握するほどには接していた。

椿やスローレットと会話する時は明らかに変化するリーナを、出会つた初日から椿は気にしている。

恐怖にも似たようなあの青ざめ方。

経験したことのある椿にとって、放つておくこともできいでいた。

その原因が現在目の前にいるのだから、言わない手はない。

「彼女が普通の女性であるなら、いくらでも優しくしたさ。彼女の家はそれなりの名家だしね。でも彼女は預言者だ」

預言者リーナ。

彼女のことを見下す呼ぶが、椿にはいまいち理解できないことだつた。

椿の世界にそのような人物がいないのだから、それは当然のことな
のだが、預言者であるが故にエルザイスに怯えるというのだから、
預言者とはなんのだろうと疑問に感じた。

その旨を椿があえて口にしなくて、エルザイスはそのことを察し
た。

「預言者とはダステイーーー國の歩む道を導く者のことだ。道から
外れたならば軌道修正をするし、止まつていれば背中を押す、とい
つた具合か」

分かるような分からないような、そんな表情を椿はエルザイスに向
けた。
そんな椿を見返し、エルザイスは「うーん」と唸りながら空を仰い
だ。

「簡単に言えば、國王のお目付け役的な立ち位置ってどこか
「お目付け役?」

椿はリーナのことを思い浮かべ、首を捻った。
あれが国王のお目付け役?
今の現状の流れでいくと、エルザイスのお目付け役と云ふことにな
る。

「ありえない……」

エルザイスのような裏表がはつきりしている男を、少し詰れば泣き
出してしまいそうなあの少女が、お目付け役をするなど、あまりにも荷が重すぎる。

逆ならばまだ有り得るだろうが……。

「ついこの間リーナと初対面だった椿でも思つんだから、俺の気持ちも分かつてくれるだろう?」

リーナには申し訳ないとは思いつつ、椿は心の中で首を縦に振った。先のエルザイヌの説明で預言者というものを理解した訳ではないが、国にとって重要なものだということは伝わってきた。だからエルザイヌも必死になる。必死という言葉が正しいとは思わないが、椿が考へ付く中では、一番しつくりきた。

それが裏目に出ている氣も少なからずするのだが。

「もつとそれらしく振る舞えばいいのに。俺みたいに」「俺みたいにして、やっぱ作ってんだ、あれ」

「あれ」とは、言わずもがな猫を被つている時のエルザイヌである。椿の言葉に、エルザイヌは当然だと言わんばかりの顔を椿に向けた。

「素であることできないだろ?、普通」

驚きを通り越して、椿はふっと吹き出した。

まさかエルザイヌが普通を語るとは思わなかつた。

エルザイヌはそんな椿を怒りこそしなかつたが、不思議そうに見つめた。

「アンタは普通じゃないでしょ
「相変わらず失礼だな……」

クスクスと笑いながら、心の奥底の椿は首を捻つていた。

なぜこんなに穏やかなんだろう?

なぜ自分はこんな穏やかに笑っているんだろう?

「俺の半数以上は『それらしく見えるように振る舞つ』行動でできてる。喋り方とか、この髪とか」

「髪？」

「長い方が珍しくてそれらしいだろ？」「

そう言つて自分の髪の毛先を掴んだエルザイヌを、椿は呆れよりか感心の眼差しで見つめていた。

そつまでしてしがみついていたいもの。

自分を偽つてまで欲しいもの。

そこまで執着できるエルザイヌを、椿は羨ましく感じていることを認めた。

羨ましいとは思うが、それと体を許すこととはまた話が別なのが。

「疲れたりしないの？」

「気付いた時から身に付いていたからな。まあ、全然疲れないってことはないんだろうが……」

自分のことであるのに、エルザイヌはどこか他人事のように言った。偽ることを疲れるとか疲れないとか、そういう分け方をしたことがないエルザイヌにとって、椿のその質問の答えは難しかった。

それが当たり前。

疲れるもなにも、いつもそうしていたのだから、そんな概念はエルザイヌにはないのだ。

「そういうえば、椿は猫被りがキレイなんだっけ。どうして？」

椿は面倒そうにエルザイヌの面白そうな顔を見返した。

「疲れるから」

「疲れるつて、俺は別に……」

「あたしが疲れるの」

猫を被る、偽る。

それらは対する相手と距離を置きたいが為にする。

距離を置かること事態を気にしているのではなく、距離を置きた
いと相手が思つことを、椿自身が察知してしまつことに原因があつ
た。

昔から相手が自分のことを避けたいと思つ気持ちを察知しやすかつ
たため、椿は逆に気を使う羽目になる。

避けたいのならば自分から避けよう。

そう思うから、面倒だつた。

いつの間にか、相手よりも自分の気持ちの方が大きくなつていると
いつた状況がよくあつた。

(親のせいかも……)

思つた瞬間に幼き頃のことが、椿の頭の中をフラッシュバックする。

親が自分によそよそしく接するから、つまく甘えられなくて。
うまく自分から接していけないから、親との関わりなんて築けなく
て。

避けられるようになれば、いつの日か自分も避けるようになつた。
自分から歩み寄れば、今とは違う関係が築けたのだろうか？

避けられることもなく、そして自分も避けずに過ごせたのだろうか？

「ならいいよ！」

「え？」

椿は思いに耽っていたため、エルザイヌが自分に振り向いていたことに気が付かなかつた。

その顔は面白そうにここにこじてこる。

「俺も椿も疲れないために、椿の前だけはやつぱり『これ』でいく。構わないだろ？」

「あたしの前だけ？」

「椿には俺の疲れを共有してもらおうか

そのエルザイヌは本当に満足そうで、椿も一緒になつて笑顔を向けていた。

「ほんと、アンタつて迷惑」

言葉とは裏腹に、満たされたものが椿の胸を暖めた。

3 (後書き)

少しと言わば、かなり歩み寄った一人でした。
データ編はもう少し続きます。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

空がうつすらと赤らんで来た頃、しばらくの沈黙をエルザイヌが破つた。

すっと音もなく立ち上がったエルザイヌは椿を振り返り、その左手を差し出した。

「そろそろ帰るわ。ゼーレが痺れを切らしたみたいだ」

「え？」

椿はその差し出された手を借りることなく立ち上がった。エルザイヌは小さく笑い、そして椿の背後に視線を移した。つられるように椿も背後に視線を向けると、いつからいたのか、エルザイヌの黒い馬と土色の馬がもう一頭寄り添うようにそこにいた。そしてその馬の横には、いつぞやエルザイヌの職務室にいた大きな男が、黙つてこちらを見つめていた。

「い、いつからいたの……」

「椿が『猫被りはキライ』と言つた辺りぐらい」

椿はエルザイヌを目を丸くして見つめた。

気配もなくそつと現れたゼーレにもそつだが、そのゼーレに気付いたエルザイヌにも驚きだ。

椿は自分の注意力のなさだらうかと考えたが、恐らくそうではないだろうと思つた。

おかしいのはこの二人だ。

「よくここにいるつてわかつたよね。完全に巻いたと思ってたけど
「ゼーレには適わないんだ」

そつまつてエルザイスはにじりと微笑み、ゼーレに小さく手を振った。

ゼーレはそれを受けて頭を垂れた。
エルザイスが素直にゼーレに負けを認めているところには、それは信頼の証だろ。椿はなぜだか、暖かい気持ちになつたのだった。

○○*○○

帰りの馬は、それはそれはゆっくりと歩を進めた。
行きと同じようにエルザイスの腕の中に収まっている椿だが、その心境はがらりと変わっていた。

エルザイスに対する感情も、その周りの人間に対する感情も、そして黒姫という自分自身の立ち位置に関しても。
城に着く頃には、巻いた全ての男たちがエルザイスを取り囲むように配備されていて、事の重大さを物語っていた。
エルザイスは「すまなかつたね」といつもの嘘笑顔で言い回つたおかげで、男たちから反論の声は上がらなかつた。

「心にもないことをいけしゃあしゃあと……」

「これも仕事だ」

そんな会話が馬上でされていたなどと、誰も思いもしていないう。

エルザイヌたちを出迎えた大勢の人間の中に、スローレットとダッシュの姿もあった。

その一人が馬上で和やかな雰囲気で会話をするエルザイヌと椿を見て、それはそれは目を丸くして見つめた。

二人も「テート作戦がこれほどまでに上手くいくとは思っていなかつたのだ。

いつたい何があつたのだろうと一人は顔を見合させたが、答えが出てくるはずもない。

「こりゃ質問攻め決定だな」

「だね」

そんな一人の楽しげな会話とは裏腹に、城内のあるバルコニーでは、椿とエルザイヌを苦々しく睨み付ける男がいた。

「若造が……！私を苦にしあつてからに！」

今にも地団駄を踏みそうな勢いである。

その様子を部屋の中で軽く微笑みを携えながら、バルコニーの男と

そう年代が変わらなそうな男が見つめていた。

「氣をお沈めくださいませ、シェンリル様。事は始まつたばかりではありませんか」「そつは言つが……。あの黒姫はなぜだか私を避けようとするのです？」

「見たところ、今回の黒姫はまだまだお若い。私どものような中年の男には、あまり免疫がないのでしょうか。なに、大丈夫です。言つたではありませんか、まだ始まつたばかりだと

「し、しかし……」

「信じてください、シェンリル様。私が間違つたことを言つたこと

がありましょうか？「

その男の一言で、シェンリルは渋々ながらも口を閉ざした。いつもシェンリルの一番近くでその道を示していた人物だ。今さらシェンリルが疑う訳がない。

そのことをこの男自身もよく理解していて、最後にその言葉で締めくくつたのだ。

「理由はなんであれ、要は選ばせればいいだけの話なんですよ」

その男の咳きにも似た言葉は、シェンリルに届くことはなかつた。シェンリルはまた外のエルザイヌを睨み付けており、今度こそ地団駄を踏んだ。

「モビル。そなたに任せるぞ」

「お任せくださいませ」

黒い渦が大きくなりつつあることを、椿はまだ何も知らないでいた。

○○*○○

椿がシャワー室から出でてくると、冷たい飲み物と「ザートラしき物」がテーブルに置かれていた。

随分と気のきいたことをする人がいるなと思いながら、椿はそのザートを遠目に見つめる。

よくよく観察してみれば、それは一人分ではなく、一人分用意されて

いることに気付いた。

そういうえば、と椿は夕食時のヒスとの会話を思い出した。

「夕食後にスロー・レット様がお話がしたいそうなのですが、よろしいですか？」

「夕食後？別に今でもいいのに」

「そういう訳にはまいりませんよ。お食事は黒姫様にとつて大切な儀式の一つとも言われていますから」

「儀式い？夕飯を食うことが儀式なわけ？」

「……精を付けるために重要なことです」

「ふーん。スローだけなんだ。ダッヂスは？」

「ダッヂス様は騎士団副団長であらせられますから、きっとお忙しいのでしょうか」

スローが来ると聞いてヒスが用意してくれたのだろう。

とはいって、スローに聞かれるることは分かつていた。

椿はテーブルの上に置かれている丸い一口サイズの物を、手掴みで口の中に放り込んだ。

甘くもちもちとした食感が、椿の世界で言ひだーなツに似ている。

「黒姫様つたらはしたないなあ」

突然だつたので椿はびくりと肩を揺らした。

声のした方を振り返ると、くすくすと笑みを振り撒きながら、スローレットが部屋に入つてくるといひだつた。

「の、ノックをしなさいよ、ノックを」

「ごめんごめん。ちょっと驚かせようと思つて。でも逆に驚かされちゃつたね」

十分驚かされたけど、と椿は心の中で毒づいた。

スローレットはゆったりとした動きで椿に近付き、「ビービー」とソファーに座るよう促した。

「エルザ兄様と仲良くなれたんだね」

「仲良く」という言葉が正しいかは分からぬが、椿は「まあ……」と濁しつつも否定はしなかつた。

実際に今まで感じていた嫌悪感のようなものは、きれいさっぱりなくなってしまった。

自分でも不思議な程に後腐れなく消えてしまったので、ビービーにも説明しにくいものがある。

しかしスローレットはその理由を問いただそうとはしなかつたので、椿は心なしかほっとした。

「良かつたね」

「良かつた、のか……？」

エルザイヌと打ち解けられたことで、椿自身は幾分が重荷のような物が降りた気はするが、それが周りから見て良いか悪いかというのは椿には分からなかつた。

どう良くてどう悪いのかも分からない。

まだそれ程、この国のこと理解できていないのだから仕がないのだ。

「僕は良かつたと思うよ。エルザ兄様と椿にとつて

「？」

椿は不思議そうに隣に腰を下ろしたスローレットに視線を送つた。スローレットは出されたお菓子に手を出すことなく、ただ見つめる

だけで口を開いた。

「エルザ兄様つて、なんでも卒なく完璧にこなせちゃうんだよね。勉強も乗馬も剣術も職務も、本當になんでも。弱点なんかないんじやないかってぐらい」

なんとなくだが、椿にも納得できる節があつた。

出会った当初は口ボソトのようだとまで感じていたのだ。今日の会話でそうではないと気付けた訳だが。

「でもそれってす」「ことだけど、悲しいことでもあるんだよ」「悲しいこと？」

「うん。エルザ兄様は誰にも頼れなかつたから、自分一人で完璧にするしかなかつたんだと思つ」

人が一人で生きていいくのは難しいと言われている。それは人には得意・不得意があるからというのも、理由の一つなのだろう。

あのエルザイヌのことだ。

不得意も難なく得意にできたのだろう、と椿は一瞬考えたが、すぐに違うと思った。

得意にしたのではなく、得意になつたように見せ掛けたのではない

か。

いくらエルザイヌが器用であつたとしても、すべてを完璧にこなせるなど神様でも無理だ。

でも出来ないことも出来るようにしなければいけなかつた。自分は知らないけれど、エルザイヌは追い込まれていたのかもしない。

そうして出来上がつたのが、あの猫被りエルザイヌだつたということだろう。

「だから、ありのままエルザ兄様に接してた椿に、ちょっと期待してた」

「ありのままで……。ただ当たり散らしてたようなもんなんだけど……」

「ううん。そうやってエルザ兄様に接する人、今までいなかつたら」

スローレットはくすくすと笑い、椿の頭に手を置いた。

突然のスローレットの行動に椿はぎょっとし、体を強張らせた。

ただイヤという訳でもなかつたので、突っぱねたりはしなかつた。

「エルザ兄様と椿があんなに仲良くなつて帰つて來たから、びっくりしたよ。ダッヂエスもすごく驚いてたよ。だから一人にとつて、有意義な時間になつたんだなあつて思つたし、仲良くなれて良かつたねつて思つた」

「う、うん……」

「でもね、僕にとつては良かつたつて思わなかつたんだよ」「は？」

さつきまで散々「良かつた」と連呼したのは、間違いなくスローレットである。

それがいきなり180度方向転換され、いよいよスローレットが何を言いたいのか分からなくなつた。

「な、何言つてるか全然わかんないんだけど……」

スローレットは面白そぞろ椿を見つめ、椿の頭を撫でるのをやめた。
「見てて面白くなつた」

「はあ？面白いも面白くないもないでしょ……」

「面白くなかったんだよ、本当に。つい昨日までは僕にしか心を開いてなかつた椿が、いつの間にかダッヂエスにもエルザ兄様にも普通になつてるんだもん。ちょっと妬けちゃつたのかな」

「や、やけ……？」

椿にはスローレットの言いたいことがまるで分からなかつた。
分かりたくないなかつただけなのかもしれない。

しかし次に続くスローレットの行動で、椿は嫌でも気付かされる羽目となるのだった。

「じゃあ、そろそろ帰るね。また明日、おやすみ黒姫様」

ちゅ

椿の額に押しあてられた柔らかい感覚。

それがなんであつたのか椿が理解するのは、スローレットが完全に退室してからのことだった。

不覚にも顔は茹でダコのようだし、キスされた額は驚くほど熱を持っていた。

可愛い弟のようだと思つていたスローレットのことだが、考えを改めねばならない。

スローレットも男なのだ。

「あのくそガキ……」

誰もいない部屋でスローレットに暴言を吐くが、それはあまりにも弱々しかつた。

4（後書き）

確信犯だね、スローくんーー！
やっぱエルザさんと兄弟らしーです。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

ふと考えると、こちらに来てから椿は随分と規則正しい生活を送っていた。

夜更けまで起きていたことはただの一度もない。

あちらにいた時はそれが当たり前だったのに、なんとも不思議な気分だ。

そうしなくても居場所がある。

理由はなんであれ、黒姫という立場が椿の居場所を作り上げていた。心地いい。

今では隠すことなくそう思えた。
もちろん口に出すことはないが。

「椿、少しいいか」

そうエルザイヌに呼び出されたのが、つい一時間前のこと。
前は飛び出したエルザイヌの職務室に、今はなんの警戒心もなくソファーに身を沈めている。

当の呼び出したエルザイヌは、椿に「少し待つてもらえるか」と告げ、机上の書類を片付けていた。

すぐに怒りだすだろうと思っていた椿は、時が来るまで大人しくそこに座っていた。

エルザイヌが不思議そうに椿を盗み見ると、思いに耽ったような椿がいる。

怒りだせば仕事を中断しようと思っていたが、それ待つていたら陽が暮れそしたら感じ、エルザイヌはペンを置いた。

そのまま椿の向かい側のソファーに座ると、椿はぱっと思考を切り替えてエルザイヌと対峙した。

「もういいの？」

「取り敢えずは」

椿は興味がなさそうに「ふーん」と声を出した。

実際、エルザイスの仕事に興味はない。あるとすればエルザイス自身についてのことだが、椿は素直にそんなことを言える性格ではない。

「……で、なんか用事なんでしょう？」

「ああ。椿はまだしばらくこちらに居ることを見越して、城で夜会を開くことになつたんだ。それで……」「ちよ、ちよっと待つた。今、なんて？」

聞き慣れない名詞だつたが、まったく知らない名詞でもなかつたが、分かるからこそ慌てるのだが。

そんな椿をエルザイスは不思議そうに見返した。

エルザイス自身はおかしなことを言つた自覚は何もなかつたし、思い返してみても特におかしな点は思いつかない。

「まだじばりくじがら問題のことを見越して? だつて椿……」「そこじゃない。いや、それも問題と言えば問題だけど……。その

後

「……もしかして、夜会?」

椿は聞きたくなかったと言わんばかりに顔を歪めた。

聞いたのは自分の方であるといつのこと、勝手な反応だといつ自覚は少なからずある。

しかし夜会といえば、それはつまり……

「パーティーってこと……」

「ああ、やうとも言つね

エルザイスには気にして様子もなくさらりと答えた。

椿は頭を抱えたくなった。

実際椿は両手で頭を抱え込み、エルザイスは更に首を傾げるしかない。

そこでエルザイスは何か閃いたよ」、「ああ」と声を上げ、にっこりと椿に微笑み掛けた。

「パーティーの作法のことなら心配いらない。俺がとつておきの先生をお呼びしておいた」

「作法なんてどうでも……、え、なに? 先生?」

「ああ。少し厳しいが、頭の良い眞面目な方だ。俺も昔は世話になつた方だから信用も置けるし、問題ないだろう?」

「どこがよ! 問題だらけじゃない!」

いつの間にか、いつも通りの椿がエルザイスの前にいた。
パーティーというものの椿の知識は映画によるものだ。

煌びやかな広いホール。

ヒラヒラの歩きにくそうなドレスに、こてこてと重そうな髪型の淑女たち。

タキシードに身を包んだ紳士にエスコートされながらのダンス。うふふ、おほほ、と会話をするイメージが椿の頭を占めている。考えただけで耐えられそうにもない。

「無理! 死んでも無理!」

椿は叫ぶだけ叫び、ため息を落とした。

どうあってもエルザイスは椿を放つておく気はないらしい。

ならばもう少しでもお手柔らかに願いたいものだ、と椿は恨めしそ

うにエルザイヌを睨み付けるのだった。

○○*○○

椿のダステイニーーーでのもつぱらの服装は、こちらに来た時の紺の制服か、こちらでの軽装とされる丈が長めのワンピースだった。そのワンピースを着ることに抵抗はあったが、毎日制服を着る」とも憚られたため今に至っている。しかし今はどうだ。

「ダメよ、そんな色のドレス。椿様にはお似合いにならないわ」

「あら、どうして？ 黒姫様には黒のドレスが一番じゃない」

「黒姫様だからって黒が似合うとわ限らないわよ。椿様にはやっぱ

り桃色のドレスが一番だわ」

「いいえ。絶対黒！」

「桃色！」

椿の部屋の中ではヒスと、また新しく黒姫付きの侍女となつたアーニャの言い合ひが始まっていた。

桃色を推すのがヒス、黒を推すのがアーニャである。

椿はげつそりした様子でそれをソファーから見つめた。

ドレスなど椿にとつてはどうでもよくて、むしろ着たいとも思えなかつた。

もちろん椿も年頃の娘なためドレスに対する憧れのような感情はあるのだが、これから会う作法の先生への憂鬱の方が何倍も大きい。椿は知らずの内にため息を落とした。

「どうしたの？ため息なんかしちゃつて。幸せが逃げりやつよ
隣からのスローレットの言葉で、椿はじつとつとした田を返した。
それはもつ睨んでいたに近い皿つきである。

「幸せなんか近の世に無いにけり。でなきやうなどこないしね

その椿の言葉を聞いたスローレットのなんと悲しい顔のことか。
椿でさえも言葉に詰まるものがある。

これだから美形は困る、と心中だけで悪態をついた。

「椿はいじめに来て不幸だったの？僕と出合ったことは椿にとって
は何でもないこと？」

「い、いや……。やうこひじじやなくして……」

「やうこひじじやなくして……」

スローレットはじりむじりな椿を、まだ追い込む。
椿が更にオドオドすることをよく知っているからする行動なのだ。
しかしそうとは知らない椿は、案の定更にオドオドする。

「い、いっかでのあたしの役立つこつか……、ねえ」

言葉を何とかして濁そうとする椿に笑いそうになるが、なんとかこ
らえてスローレットは首を少しく傾けた。
「こひで吹き出すのはまだ早い。

「じゃあ、僕と会つたことはな？」

「えつと……。不幸中の幸い、かな？」

「不幸中の幸い？」

「むつさい男集団の中の美青年を見つけた感覺みたいな、銀杏だけのところに消臭力見つけた感覺みたいな。そんなかんじ」

椿が言つてることの半分も理解できなかつたスローレットだが、その一生懸命な説明にいよいよ笑みが零れ始めた。

「オロ一されていたのだろうことは薄々理解もできだし。

「かわいいね、椿は」

「は？」

突然ケロッとした物言いをしたスローレットに対し、椿はすっとんきょうな声を上げた。

そこでやつとスローレットが芝居をしていたことに気付いた。

慌てた分怒りも大きい。

「スロー、あんたねえ！人をからかうのも大概にしなさいよね！」

「だつて椿がかわいいんだもん。仕方ないでしょ？」「かわつ……！」

スローレットの口から何度となく椿に向けられる単語であるが、やはり慣れることはない。

一発叩けばおとなしくなるのでは？という少々荒々しい考えも浮かびはあるが、こんな美形を叩けるほどの度胸が椿にはなかつた。けつときょくは深いため息をして、諦めるしか道はないのだった。

「もつ……。仕方ないってなに……。訳わかんない

「椿様、こちらのドレスを」試着願えますか？」

ヒスからの言葉と共に渡されたのは、何がどうなったのか純白のドレスであった。

もはや椿に突つ込む余裕すらない。

隣では「椿に似合いそうだね」と意気揚々としたようなスローレットの声がするが、こちらも放つておいた。

自分を放つておいてくれないのは、何もエルザイヌだけではない。その弟もその侍女たちも同じなのだ。

「あたしに安息の地なんかないんだ……」

誰も自分を放つておかないと云ふことは、今までないことで疲れはする。

しかし同時に胸の辺りが暖かいのも事実だ。

嬉しいのかもしない。

自分はこれを望んでいたのかもしない。

椿の中では確実に変化が起きていた。

「あー、ダッヂエスだけどぉ！入つていいか？」

扉の向こうの声の主もまた、椿を放つておかない一人である。

（ああ、でもやっぱ、疲れるんですけど……）

ため息は椿の口から自然と出た。

パーティー 1（後書き）

遅い投稿誠に申し訳ありませんでした。

もうグダグダですね。

これから展開に期待します。

椿ちゃんたちがんばれー！

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7682j/>

新月のご招待

2011年8月23日21時16分発行